

「私は福音を恥としない」

ローマ人への手紙1章14節—17節

14 わたしには、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任がある。15 そこで、わたしとしての切なる願いは、ローマにいるあなたがたにも、福音を宣べ伝えることなのである。16 わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。17 神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである（ローマ1章14節—17節）。

ローマ人への手紙とは言うまでもなくローマに宛てられた手紙です。この手紙を書いたのはキリスト教における宣教者であるパウロであり、その彼の人となりについては先々週、お話しした通りです。実は彼がこの手紙を書いた時に彼はローマに行ったことはありませんでした。しかし、キリストの教え、すなわち福音がローマにおいて拡がりを見せていると知ったパウロはこの手紙を書いたのです。なぜ、ローマにキリスト教が伝わったのか。色々な説がありますが、エルサレムでペテロが福音を伝えた時に、その場に「ローマ人で旅にきている者」がいた（使徒行伝2章10節）と聖書は記しています。おそらく、これらの人達がこの福音を携えてローマに帰って行ったのでしょう。

そして、そのまだ行ったこともない、会ったこともない人達に向けて、パウロはローマ1章8節において「彼らのことを神に感謝し」、9節—10節において「彼らのために祈り」、11節—12節において「彼らへの愛を表した」のであります。そして、驚くべきことに会ったこともない彼らに向かい13節—14節において「彼らに対して責任を負っている」というのです。そして15節においてその彼らの元を「訪ねたい」と言っています。今日はこのパウロのローマ人に宛てた手紙の中から16節にあります「わたしは福音を恥としない」ということを見ていきたいのです。

ここでパウロは「私は福音を恥としない」と言いました。そして、この彼の言葉の背景を察する時にそこには「福音を恥としてしまう可能性」なるものがあったということが読み取れます。

まず最初に私達はこの手紙がローマに宛てて書かれているものであるということを思い起こさなければなりません。皆さんもご存知のように、当時のローマは世界最強の軍隊を持ち、広大な領土を手中に収め、後生の人間の思想に影響を残すような哲学や芸術を生んできた町でもあります。その大国にローマの支配の元にあったユダヤ人として生まれ、何も所有せずに生きたイエス・キリストについてパウロは伝えようとしていたのです。

確認しましょう。大国、強国がある国を支配下にします。植民地にします。時にその国はその支配した国、植民地とした国に対して、自らの文化、言語、宗教を押しつけます。今日、そのようにしてかつてヨーロッパの国々に植民地化された国々は彼らの言語を話しません。スペイン語、ポルトガル語、英語・・・あげればきりがありません。しかし、ここで確認したのですが、この流れは支配国から植民地とされた国という方向であって、この流れが逆流、すなわち植民地とされた国の文化、言語、宗教が支配国のそれになるということはないのです。

しかし、その逆流が起きたということが、ローマに伝えられたキリスト教なのです。言うまでもありません、このパウロの時代から長い間、キリスト教はローマ帝国の迫害を受けますが、紀元392年、ローマはキリスト教を国教としました。キリスト教とは弱小の民族の間に神が起こしたもので、それが彼らを支配している世界最強国家の国教となりました。このような逆流はまさしく人間業ではありません。何度も申し上げますようにそれはまさしく、イエス・キリストが言われた「聖霊があなたがたにくる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、私の証人となるであろう」（使徒行伝1章8節）という約束に基づく聖霊の御業だったのです。

パウロは「その教えの内容を伝えようとしている相手」と「自分とその福音が置かれている状況というもの」をよく理解していたに違いありません。さらにパウロはその時、テントを造る仕事をしながら福音を伝えていました。決して社会的な力があるというようなポジションに彼はいませんでした。しかも、ローマ人が忌み嫌う十字架刑となったイエスについて、このイエスこそが私達の希望なのだというようなメッセージを伝えるということ、さらに、ローマ建築に見られるように、数学と科学を愛するローマ人に向かって、このイエスは死んで甦ったということを伝えるということ。これらを富と知恵と力によって立て上げられたローマ帝国に伝えるということは常識的に考えたら恥ずかしいことなのかもしれません。

しかし、これら恥ずかしくて萎縮してしまうような状況に立たされていたパウロは「私はこの福音を恥とはしない」と言いました。なぜでしょうか、彼は人の目を意識していたのではなく、神を意識していたからです。

第二次世界大戦が日本の敗戦という結果に終わろうとしていた1944年、アメリカ政府は戦後処理政策のために、日本人について学ぶ必要がありました。そこで、アメリカ陸軍局は高名な文化人類学者ルース・ベネディクトに日本人論を書くようにという命令を下しました。そこで、彼女は有名な「菊と刀」という日本の文化についての書物を書いたのです。

その本の中で、彼女は特に日本の文化を「恥の文化」として位置づけています。なぜ日本人はこんなにも他人の目に映った自分の姿にこだわるのだろうか。私たちはよくそのように言われますが、この問いに答えてくれるのが、この「恥の文化」です。

すなわち「私たちの言動は、他人が自分の行動に対してどういう判断を下すか、その他人の判断を基準にして自分の方針を定める」というのです。そして「恥の文化は人に迷惑をかけるような恥ずかしいことはしない」ということを道徳基準としているのです。この恥の文化は人の目を大切にするので、周囲に対する気配りや気遣い、

謙虚さや協調性などといった良い面があり、それは日本人の美德となる部分であります。

これらベネディクトが指摘していることに対して、私達は思い当たることがあります。確かに私達は人の目を気にするのです。日本人のクリスチャン人口が100年経っても1%を突き破っていないということの一つに、信仰を持つということは本来、「個人と神との関係の確立」であることなのに、私たちの場合は、その時に回りを見て、他の人は信仰を持つ私をどう見ているのだろうかということを考えてしまうということが多分にあります、一人の人間の信念、信仰という、最も個人の自由意志のもとになされていくべき精神的な意思決定の時ですら、私たちは他人の判断を基準にして自分の方針を定めてしまうのです。皆さん、このようなDNAが私達の体に染み込まれているものです。

でも、いかがでしょうか。私たちのたった一度の人生を、私達はもっと主体的に生きるべきなのではないでしょうか。自分が何を信じて生きていくのか、それは人間として生まれてきた限り、私達にとって最も大切なものであり、それは誰かれの問題ではなく私達の問題なのです。そして、そこには本当の自由があるのではないのでしょうか。私たちが“気にかけている視線”の正体はあやふやで、それらは私たちの人生に何の責任もとってくれはしないのです。

イエス・キリストが言われているとおりです「もし、私の言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、本当に私の弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネによる福音書8章31-32節）。このイエスの言葉は、私達が過剰に人目を気にする恥の文化から脱皮して、神の前に自分はどうあるべきかという主体的な人生を送ることのさいわいを私達に語りかけていないのでしょうか。

当時のローマ帝国において、皇帝カイザルの力は絶大なものでした、彼が何かの命令を出せば、それはすぐに帝国の隅々にまでおよびました。まさしくその命令と彼の名前は「泣く子も黙る」というような権威と迫力があつたに違い有りません。しかし、パウロにとって

それは意味のないことでした。確かに彼の前にはローマ帝国の圧倒的な軍事力と繁栄があったことでしょう。しかし、それらを前にパウロは飼い葉おけで生まれ、十字架に磔にされたイエス・キリストを恥としなかったのです。彼は主体的に神の前に生きたからです。彼は彼が伝えようとしている福音について、それを「神の福音」とパウロはローマ人への手紙1章1節で書いています。どうして彼がその神の福音を伝えていくことを恥とするのでしょうか。カイザルがいかほどの人間でしょうか。彼とてすら、鼻で息する人にすぎないのです。私は「イエス・キリストとの出会いによって人生を変えられました」という人には数え切れないほど会いましたが「私はカイザルの生き方によって人生を変えられました」という人には一度も会ったことはありませんし、これからもそのような人に会うことは、おそくないことでしょう。

皆さん、私達は極めて自分中心で物事を見ていく者です。こうなったら恥ずかしい思いをするだろうとか、ああ、やだやだ、あの人にどう思われているのだろうというように、私達は考えます。しかし、その時に私たちは一つの視点を忘れてしまっています。それは、神の視点です。

神が本当に存在しているならば、そして神によってそんな私達が作られたとするならば、そして私たちの本質というものが罪によって汚されているならば、一番、恥じる思いでいるのは、私たちが造られた父なる神であります。

命を与えられた者が、いつも人の揚げ足ばかりを取り、その口をもって、同じく神が造った人を罵っている。口だけではなく、手を出し、足を出し、それだけではない凶器をもち、同じ人間に襲いかかる。莫大な資金を出して、大量殺戮兵器を造り出している。そればかりではない、造られた者が造った存在を無視して生きている。

こんな人間であるならば、それは神にとって私達を造られたことを恥じても仕方ないと思います。そして、そんな私たちに神が辱しめを与えても私達は何も文句の言えない者であります。しかし、神は

私達を辱める代わりに、一人子イエスを辱められたのです。そうやって私たちの恥は取り除かれたのです。

先に触れました「菊と刀」には「恥」以外にも日本人の特徴として「恩」というものを取り上げています。私達日本人は「恩」を大切にしている国民です。「恩」を大切にしている私達たちにとって、イエス・キリストが私達が受ける恥を全て、自分の身に負われたということを知る時に感じる、キリストに対するご恩は、いかなる恩にも勝るものではないでしょうか。

年末にいただいたお歳暮に対する恩も大切でしょうが、命をかけてまで私達の恥を取り除けられたということは、私達たちにとってかけがえのないものであると思います。パウロはこのことを理解していたのでしょ。故にたとえその相手がローマ帝国であっても、キリストに関することにおいて、私は何も恥とはしないと申すのです。

今から25年ほど前にこの路傍伝道を日本一の繁華街、新宿で始めた宣教師がいました。彼は真っ赤なスーツを着て、新宿東口のアルタというビルの前のガードレールに立ち、福音を語りました。彼の場合、信号待ちをしている人達の、その数十秒の間に福音を早口で語ったというのです。通りをちょっと入れば、そこは歌舞伎町です。あらゆる人間がああ境界にはいます。夜になれば酔っ払いが彼にいちやもんをつけたりします。

彼の名前は皆さんもよく知っているアーサー・ホーランド。アメリカ人の父と日本人の母をもつ宣教師です。ある時、一人の若者が路上に立ち止まり、この風変わりな宣教師の話に耳を傾けていました。その横に一人のビジネスマンが立ちました。そして、その青年にこう言ったのです「ああいう風に人目をはばからずに、確信をもって人に語る事ができるものが君にはあるかい。俺はうらやましいな一、ああいうの」。

その青年の名前もビジネスマンも誰なのか知りません。分かっていることは、彼らはどこにでもいる私達と同じ日本人であるというこ

2017年7月9日 「私は福音を恥としない」

とです。そのビジネスマンがもらした一言は実は私達日本人の心の奥底にある思いなのではないでしょうか。

いつも人目を気にしている。もしかしたら自分の人生は、一度も自分の「信念」というものを持たないで、終わるのかもしれない。この人生を本当に自分は「生ききった」といえるのだろうか。この自分の信じていることに関しては、一步も譲れない。そのような自由の中を生きてきたのだろうか。

私達の恥は取りのかれているのです。イエスの十字架によって。このお方が私達の恥を一身に受けられたからです。「私は福音を恥とはしない」。この一言を己がものとする時に、私達はその人生に堅固な土台を据えたことになりそうです。そこに立ち続ける人はさいわいだと思います。お祈りしましょう。